

青少年くらし

家庭版

発行 倉敷市教育委員会
編集 生涯学習課
426-3845

7月



「誰もが暮らしやすい地域社会を目指して」

「今、私たちができること」後編

令和七年二月二十三日にライフパーク倉敷で開催された、倉敷市青少年健全育成推進大会 講演会の要旨を二回に分けてお届けします。講師は、ノートルダム清心女子大学 人間生活学部児童学科准教授 インクルーシブ教育研究センター長 青山 新吾（あおやま・しんご）先生です。

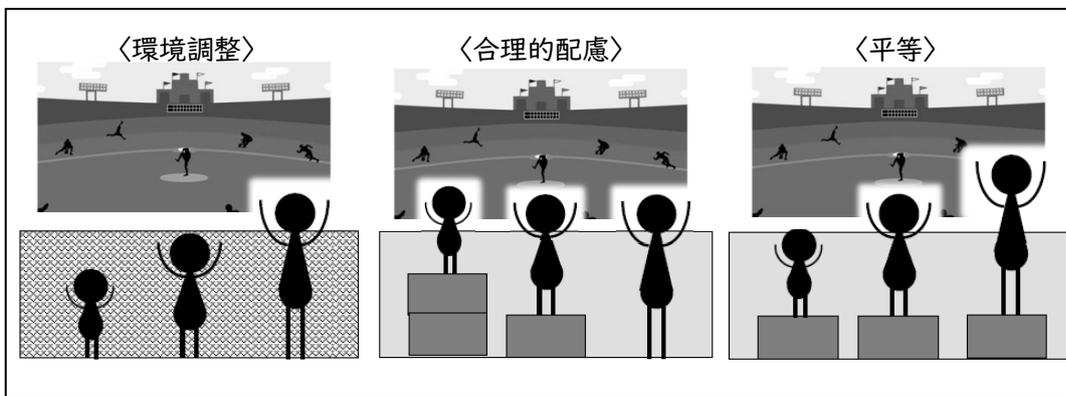
●合理的配慮

練習しても音読が苦手な子の例を見ると、その子に合った個別の配慮や支援が大切になってきます。つまり、「違うやり方で読んでもよいことにすればいい」という考え方で、「合理的配慮」といいます。合理的配慮は、一般的に「障害のある人となない人がともに暮らし、学んでいくために、必要な変更や調整をすること」と定義され、簡単に言えば、変えてみたり少し調整したりして、みんなで一緒にやれるようにしようということです。合理的配慮の話をする時、「その子だけ特別扱いは駄目ですよね。みんな同じようにしないと、逆にいじめられるかもしれませんよね」と言われることがあります。

あるチームが「全員が楽しめるよう、平等に、足を置ける台を配ります」として全員に台を渡しました。ただ、右の人は、台がなくとも見えます。真ん中の人は、よく見えて喜んでいきます。左側の人は、「一個じゃ見えないから意味ない」と思っています。全員平等にすると、こんなことになる。なので、この絵だと、右側の人が、必要な台を左側の人にプレゼントすると、右側の人は、野球観戦を楽しめるようになった。つまり、公平に試合を楽しんでもらう方法を考えるのが、合理的配慮の考え方で、平等に何かをすることはないんです。そのことがわかりやすい例としてよく出る図です。そして、ふと、「壁じゃなくて網目なら、台がなくてもみんな見える」と思いつく。これが、環境を調整するという考え方で、合理的配慮は、環境を変えらなければならない場合があります。

●環境を調整する

環境に関してある話をします。聴覚障害、高度難聴の方の話です。この方は、資格を取得して企業で働いていたんですが、退職するかもと言ってます。今の業務は、一日の途中に指示変更が多くあるけど、



聞き落としが多く、ミスが多いと思われるという理由でした。周りは、その方の障害を知ってるけど、変更を部屋全体に口で伝えてるんじゃないかと思う。つまり、ミスが多いのは、変更指示が届いてないから。でも、彼女は聞こえないんです。障害を捉えるとき、一般的に、社会モデルやICFモデルというモデルで説明します。簡単に言えば、難聴で聞こえないから仕事でミスが出ると捉えるのではなく、環境因子を変えたら状況は変わると捉えるのです。その際、彼女は、待っているだけではなく、仕事がしやすいよう要望を伝えようと、会社と話をしました。すると、謝罪があり、改善策としてホワイトボードを部屋に置き、変更はそこに書いて、必ず知らせて確認することになりました。すると、他の人の聞き落としも解決し始めて、全体のミスが減ったらしいです。要するに、視覚化したのです。

今の話は、この方のためだけに、合理的配慮です。でも、実際には環境の調整ユニバーサルデザインという、多くの方に役立つことに繋がっている。社会モデルの考え方は大切で、環境因子のほか、個人因子が重要です。僕は、この話に、彼女の責任感や誠実さなど、個人因子も影響していると思うんですよ。皆様方の職場や地域で、環境を変えるほか、本人も自分と向き合う必要があるということです。

人と人がともに生きるかたちを考えたときに、「やさしい」として「いい」として、合理的配慮と、そこには環境が絡んでくることがあるという、その三つがすごく大切なと思います。

●「マイノリティ」とは？

インクルーシブを考えていくと、「様々なマイノリティを含むすべての人」という言い方をよくします。「様々なマイノリティ」って聞いたとき、どんな方が浮かびますか。「障がいのある人」はよく浮かぶと思うんです。他にも、性的マイノリティ、外国にルーツがある子どもなど、いろんな属性あると思います。この「マイノリティ」とは誰を指すと思いますか？学生のほぼ全員が「少数民族」って言います。マジョリティが多数派、マイノリティはわかりやすい属性のある少数派。マジョリティ側の人

は考えなくても困らないけど、マイノリティ側の人、考えないと困る構図があり、さらに、マジョリティは数の多さではなく、より主流で、権力のある方という意味もあるという研究者もいます。マイノリティは少数派とは限らないということです。

このような例を学生の話から紹介します。高校の体育の授業で、十分の休憩時間指着替えて、離れた運動場まで行って並ぶ指示があり、遅れたら減点、班全員の連帯責任となった。移動のための授業時間の配慮はなく、テキパキ行動するのが苦手な

生徒は理不尽に感じていた、という例です。この場合、基準となる生徒像がつくられていたことが問題で、解決には、マイノリティ側の問題をマジョリティ側が知る必要がある、と感じました。ちなみに、この例のマジョリティは、権力があり、主流な側である教員だと思います。数が少数でもマジョリティになる場合がある、わかりやすい例として、学生に話しています。

また、場面や立場によってマジョリティ側に立つこともあります。この例は、一見先生がマジョリティで生徒がマイノリティに見えますが、違うと言った学生がいました。「自分は行動が速く、困ってなかったから、生徒側のマジョリティサイドにいたと思う。遅れる子を迷惑だと感じていたかもしれない」と言いました。生徒側にマジョリティとマイノリティの構造ができて、自分は完全にマジョリティサイドにいたことに、授業の中で、気づいたんです。マイノリティ側の生徒はすごく困っています。考えなければならぬけれど、自分は考えなくてもよかった。つまり、場面によって決まることもあって、限定された少数マイノリティだけを指して、インクルーシブと言っわけではない。自分の立場によって、マイノリティの関係、マジョリティとマイノリティの関係が相対的に決まるということなんです。

そう考えると、学校や地域社会の中の

当たり前をどう見直していけるか。マジョリティ側は困らないけれど、マイノリティ側は困ることないのかなど考えることがヒントになると思います。



連島中学校
3年 澤 森川 溍
(令和6年度)

「竹」
(水墨画)

水墨画は墨一色で表
現しなければ濃淡な
の奥行きを表現し
たり、筆の使い方を
感表した。

●長縄跳びから感じること

最後に、学校の長縄跳びの話をしたと思います。クラスみんなで何回跳べるか挑戦する。苦手な人がいると、下手な子が入るなって言われたり、跳べるまで特訓だっって言われて学校に行けなくなったり、人生に影響を及ぼすような話も聞きます。

僕は、長縄をしたくない子もいるし、跳びたくない子も、縄をまわしたい子もいるし、跳べないけど解説や分析が得意な子もいるし、跳べなくても何回も跳ぶ子もいるし、あと、プログラミングしたバーチャル長

縄をしたくない子もいるかもしれないと思います。本来、多様な子どもたちと長縄跳びするのは、根性で全員同じように跳ぶことだけではない。システムそのものを見直して、環境を変えて、でも必要に応じて個別の関わりも行う。学生たちと話していたら出たんですよね。「やっぱり跳びたいと思う子もいるから、応援する子もいるといいよね」「でも、応援されたくない子もいるよね」「全員が跳びたいなんて思っていないもんね。でも、見ていて、跳んでみようかなって思えたら、それもいいよね」「そして、跳びたくなったらおいでって、誰か言うてくれたらいいよね」って。

学校で、多様な子どもたちが、自分を大切にしながら、されながら、人と人がともに生きるかたちを探っていく。その先にあるのが、いろんな人が暮らしやすい地域社会の姿ではないかと思うようになりました。

でも、これってすごく時間がかかって、とても難しく、うまく解決せずにもめごとが起きると思います。できないならやらなくていいって言う方が、その場ではめごとが少なくて済む。でも、やっぱり、対話して「ここまではやれたけど難しいな、どうしよう？」って考えていくことで、今日のテーマに近づく。愚直に対話していることが大切なのかなと思います。今日はありがとうございました。(終わり)